

愛知万博もいよいよ2年後にせまり、会場全体の構想も日に日に具体化が進められている。今回は地球環境への配慮をうたっているだけに、パビリオンなどの建築物や会場の「造成、などがどのようにおこなわれるのか、興味をひかれるところだ。会場計画面と建築面の監修をおこない、自ら施設の設計にもあたっているチーフ・プロデューサーの原田鎮郎氏に、会場計画における具体的な取り組みを聞いた。

EXPO2005 AICHI 愛知万博通信

特別企画

自然環境に配慮した リユースできる会場づくりを

原田鎮郎

2005年日本国際博覧会協会
チーフプロデューサー
(株)環境システム研究所代表取締役

聞き手=水田由紀



会場内にはグローバル・ループがこのような設置される予定

グローバル・コムのイメージ図



はらだ・しずお
建築家。1943年、東京都生まれ。早稲田大学理工学部建築学科卒業、同大学院建築工学専攻修士課程修了。68～75年、菊竹清訓建築設計事務所に在籍し、ハワイ海上都市、沖縄海洋博政府館アクアポリス等の設計を担当。75～79年まで(株)都市環境計画研究所に在籍。79年に(株)環境システム研究所を設立し、従来の社会システム開発に加えて超高層建築などの研究に参加。博覧会関連では、なら・シルクロード博、世界都市博覧会等を担当。



発想の転換をコンセプトに

——二〇〇五年の愛知万博で、原田さんはチーフ・プロデューサーとして会場計画面と建築面の監修をされると同時に、自ら施設の設計にもあたられます。今日は、その会場づくりの基本構想をお聞きしたいと思います。

原田——まず言えるのは、従来の博覧会とは、かなり趣の違う発想でスタートしているということですね。博覧会のもつ意義自体、大阪万博の頃などからみると変わってきていると思うんですね。

博覧会は、一九五一年のロンドン万博を皮切りに約一五〇年の歴史があります。大阪万博あたりまでは、それぞれの時代で違いはあるものの、本能的にはどれも同じような方向性をもっていたと思います。それは、産業や技術の発展を形で示すということ。パリ万博のエッフェル塔に象徴されるように、今までにないこんなことができるんだぞ、という可能性を示すものであったんです。

しかし今回の愛知万博は、テーマ「自然の叡知」にあるように、地球環境への配慮を前提としたコンセプトでスタートしています。規模もだいぶ小さいですし、会場づくりも華やかなパビリオンを並べるのではなく、「環境」をキーワードに、発想の転換をはかろうとするものです。

——具体的にはどのようなことをなさるのですか？

原田——まず、会場内のパビリオンの建設に規定を設けています。参加するそれぞれの国が自由にパビリオンをつくるのではなく、博覧会協会の方で一辺が一メートル、高さ九メートルというパビリオンのモジュールを用意して、それぞれの国が

使う個数をお渡しするんです。展示は、その中のインテリアの部分になります。

そして万博終了後には、そのモジュールが有効に再利用される可能性を探っています。たとえば、愛知県内の八八市町村にある小学校で、教室などの施設として使っていたことができないうか、とか。それができれば、今回の万博のモニユメントのひとつになると思うのです。エッフェル塔や太陽の塔のようなハードではなく、いわばソフト面のモニユメントです。何年かたつて、それを使用して人が「そういえばあそこから新しいことが起こったな」と思い出してくれるような、社会に浸透したのものになるといいですね。

会場をめぐるループ

会場内のセンターゾーンには、ループ型の遊歩道を建設されますね。

原田—ええ、「グローバル・ループ」と呼んでいるもので、人工の空中回廊がセンターゾーンの施設を結んで一周するものです。ループは幅二メートル、全長二・六キロメートル。丘のような高いところでは接地しますが、谷のようなところでは浮いている状態になります。

—自然の地形をそのまま生かした動線ですね。

原田—そうですね。これも、万博の六カ月間だけのためにブルドーザーを入れて大幅に地形を崩すのはいかなるものか、という環境保護の考えからきています。ループの場合は取りはずせばまた元の状態に戻せますし、それを部分的にリユースすることもできるんです。

今回、会場全体を通じて、3Rという考え方を

徹底しています。3Rというのは、リデュース、リユース、リサイクル。無駄なものをなるべく減らして、そのまま後でどこかで使う、あるいは形を変えて再利用する。このために早稲田大学の木村建一先生を中心に3R委員会を立ち上げて、昨年初めからさまざまな研究をしていただいています。また、建築資材などの点でも環境に配慮しています。たとえば地中に打つ杭はネジ式のものを使うんです。普通は杭は地中に残るのですが、これだと引き抜いてリユースできるんですね。

「グローバル・ループ」の床も木製を想定しています。ウッドチップとプラスチックでつくられたリサイクル・ウッドや間伐材などを使おうかと。ループの上には部分的に日よけをつけるのですが、そこに植物を植えて、グリーンシエルトーをつくることも考えています。

バリアフリーも、今回力を入れて取り組みたいことのひとつですね。ループの勾配は一二〇分の程度。これは車椅子を押して上がれるくらいの勾配です。また全長二・六キロという距離は高齢者の方には少し大変ですから、人力タクシーや電動トラムを走らせることも検討しています。

NGO、NPOが活躍

—今回の万博には一〇〇以上の国や国際機関の参加が見込まれるとのことですが、パビリオンのゾーンニングなどはどう計画されていますか？

原田—「グローバル・コモン」という共有地を六つ作り、それぞれオセアニア、ヨーロッパなど、さまざまなグループ分けをした中に入っています。そして会場の南北を、IMTSという、トヨタが開発

した無人・有人運転に切り替えられるデュアルモードの交通システムが結びます。また、パビリオンに入るときは、チケットに埋め込まれたICチップを使って予約するなどして、来場者の待ち時間をなるべく少なくしたいと思っています。

今回の会場は森や池などがある自然が豊かな土地ですので、イベントもその持ち味をいかしたものを模索中です。たとえば、池の水を使ったナイトショー。花火をたくさん上げるような騒がしいものではなく、水面に映る光や景色を楽しんでいただくような静かなもの。それから、森林ゾーンでは子どもたちの森の体験ツアーですね。インタプリター（解説員）をつけて森の中に入ってもらいますが、ある場所では森の精が出てくるなど、リアルとバーチャルをミックスしたようなもの。そういったさまざまな体験型のイベントを企画しています。ほかに人工霧の中を散歩するゾーン、新エネルギー発電によって余った電力を使った「足湯ゾーン」などもつくろうと思っています。

—それは楽しみです。ところで、会場運営にはボランティアも多数参加されるのでしょうか。

原田—そうですね。「地球市民村」ゾーンを中心に、NGOやNPOの参加を期待していますし、ボランティアに関しては最終的には二万人の参加を期待しています。「国境なき医師団」ではありませんが、二一世紀は国境を越えて活動する組織が飛躍的に増える時代です。その新しい活動が今までになく現われる国際博覧会になると思います。

—だんだんと万博全体の構想や、環境配慮への具体的な取り組みが見えてきました。二年後に、実際の会場に足を運ぶのを楽しみにしています。